
子供の描く絵の貴賤

あおいとし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供の描く絵の貴賤

【著者名】

あおいとし

【あらすじ】

なんて事のない日常。

保健室でいかがわしい行為の最中に、抵抗されて噛まれたらしい。一時限目の授業と引き替えに、朝っぱらから僕たち3年生だけが体育館に集められた。報告されなければ知りもしなかつたし、知りたくない事件の入り口と出口だけを教えられ、肝心の中身にはモザイクをかけて話す学年主任は大真面目に僕らに性を説いていた。オープンに性のあり方を力説されると、経験者達は忍び笑い、未経験者は他人事のように流していく。その結果誰も得をしない恥ずかしさだけが残る集会が終わり教室に帰る頃には、当事者は誰だという犯人探しにシフトした。僕らは思春期なんて崇高な季節よりも、誰と誰がセックスしたのかという週刊誌レベルの低俗で身近なゴシップみたいな俗世間の予備軍なのだ。

それからしばらくして保健室淫行事件は生徒達の自動探索機能により乙が特定された。

ちなみに甲の方は集会前後に既に特定されている。腕に包帯を巻いていたからだ。4組の那岐祐一という生徒で、バレー部の副キャプテンで男女共にモテる美男子だという。顔を見れば見かけたことがあると思うが僕はよく知らない。もちろん男子からは集会終了後に英雄扱いされたらしい。

僕自身、そういうことに興味がないわけではないが、特に気に入る意中の女子というのがいない。なので勝手に教室や廊下で流れる言葉を勝手に取り込んでしまった程度の話しか聞いていない。だけども乙が誰かというのを聞いた時には何か引っかかるものを感じた。

「誰、だつて？」

「だから、その平沢未玖だよ」

小さい声で本人に聞こえないように友人がそう言つので、思わず

本人をガン見してしまった。

「まさか。想像できない」

「でもイケメン副キャラブテン本人からの情報だぜ」

「知り合いだつたのか？」

「いやぜんぜん。また聞きのまたまた聞きだ」

僕はいつものグループに混じつて弁当を突付いている平沢を思つた。特に目立つほど可愛いわけでもないが、相手にされない端臭い女子でもない。話しかければ会話もするし、男女入り交じつてふざけあつたりもしてゐるも見たことがある。けどそれほど突飛な何かをするほど主張の強さがある女子ではないと思つていた。たぶん？：3で大人しいと思われると思う。失礼な言い方をすれば可もなく不可もない生徒に見えた。それが話題の最先端の事をした生徒とは思えなくて、自分の思つている中身と実際の齟齬を見せつけられたみたいで納得できなかつた。

「男に比べてレベルがつり合わないよな」

友人が下世話に笑う。よく知りもしない男に見合つかを評価するなんて物好きだと思う。けど別の意味で僕も同意していた。

「平沢は、もつと落ち着いた奴の方が似合うと思う」

友人が一瞬変な顔をしたが、僕の言つたことは拾わなかつた。

「でもどうして噛んだんだろうな」

好き合つてるなら拒む必要がないと思う。

「場所がイヤだつたんだろ。女つて初めての場所を気にするつて言うしさ」

どうして初めてだつたと分かるのか疑問に思つたが聞かなかつた。

「気になるな。どうして噛んだのか」

「だつたら聞いてみろよ。噛まないで舐めてほしいつて」

茶化す言葉に反応しないで窓を見ながら平沢を思つた。

オリモノがついたナップキンが女子トイレから見つかつたとか、体育馆裏の出入り口に未使用の5枚づづりのコンドームが捨てられて

いたとか、身体的特徴の変化は女子の方がやつかりで、精神的好奇心の抑制は男子の方が辛い。このそれぞれの自分にまだ折り合いを付けて生活出来るから、あるいは鈍感でいられるから男女入り交じつて生活が出来るんだと僕は思っていた。

でも保健室事件の当事者の片割れが、平沢だと知つてから、僕の精神的好奇心の抑制は歯止めが利きずらくなつっていた。

僕は、平沢未玖がどうして那岐祐一を噛んだのか知りたい。

別に僕は平沢のことが好きでもなんでもない。18になつても僕は他人が好きだという自覚はあるでない。

でも僕は平沢に胸のもやもやを告白したかった。一般に言う告白とはずいぶん違うような気がするが、特別な好感を他人に見いだせない僕が、他人の一点に執着することは告白に値すると思った。それが好意というよりも好奇心に寄つているとしても。

僕は平沢と二人きりになれるタイミングを探つた。それでも中々機会はおとずれず、もうその話題が色を失いかけた頃、たまたま寄つてみた放課後の図書室で平沢を見かけた。

「珍しい。放課後ここで誰かと合ひうなんてめつたにないの「よくいるの？」

「週に2回程度だけね」

平沢が地味だというのは見た目よりも言葉数の少なさだと僕は思つていた。

「あんまり読んでる人いないけど、よく見る月刊誌や文芸雑誌があるから落ち着いて読めるの。人も少ないから気にならないしね」

あまりない知識を総動員して僕は平沢の会話に合わせた。以外にもサッカーファンだということ。家では弟の影響で対戦ゲームをよくすること。休日は古本屋で一日過ごせることなど、およそ教室にいるときにはちらりとも見えない平沢未玖の実体と仮面の有無を僕は見た。

「平沢って、案外しゃべるんだね。もつと寡黙なほうだと思ってた」つい本音が出てしまって、イヤな顔をされるかと思ったが本人は

苦笑いした。

「昔から人が多い場所ではうまくしゃべれないの。テンション上がればいけるんだけど、周りに併せるのは苦手」

「一対一なら大丈夫?」

自分の顔がひどく優しげな詐欺師に見えた。

「誰でもって訳じやないけど、いまこつしてる話してるわけだし、分からぬかも」

恥ずかしそうに笑う平沢を見て、僕は告白することを決めた。

「保健室のアレ。平沢だつて本当?」

穏やかに話していた平沢が困ったような顔をして、いつも見ていた平沢に戻った。

「それが聞いたかったの?」

「今の平沢ならそういうことがあつても違和感のない普通の女子だつて分かつたから」

平沢は曖昧な顔をするだけで何も言わない。

「だからどうして噛んだのか、聞いたかっただけ」

僕のもやもやは事件の関心事を本人に言つたところでほぼ解消されてしまった。平沢からの答えが無くても十分満足していた。そこで改めて今までの自分の気持ちが生産性のないものだと再認識した。

「ちょっと来て」

「え?」

僕の終わった出来事に平沢は答えず、僕の腕を取つて図書室の外に出でいく。

「ちょっと平沢。そんな掴まなくてもいいから」

「聞かせてあげる」

有無を言わせずにそれだけ言つてずんずん廊下を進む平沢に、それ以上何も言わず黙つて腕を取られていた。

着いた場所は保健室で、僕は半ば投げ出されるよつてベッドに座らされた。

「大丈夫。この時間はいつも先生がいないの」

聞いてもいなことを言つて平沢が僕の隣に座る。僕は平常心を保つため、目の前の女子が誰だったか忘れようとした。

「男の方の事は知ってる?」

「那岐つて名前だけ」

「別に付き合つてたわけじゃないの。家が近所で、一番頼みやすかつたから」

弁明するような言い方に恥ずかしさを感じた。それは僕が勝手に彼女の恥ずかしさを思つただけかもしれない。

「ここで、するのを?」

「それは条件だつたの。噛ませてもらうための。なら触りたいって言うから」

俯いて小さく話す彼女の矛盾が、僕の終わつた関心を蘇らせた。

「それつて、噛むのが目的だつたつて事?」

平沢は首を振つて否定した。

「血が、飲みたかったのよ」

それ以上彼女は言わなかつた。だから僕も聞かなかつた。そんなことよりも僕は彼女の嗜好が聞きたかったからだ。

「那岐のはおいしかつた?」

大きくなつた彼女の目には期待があつた。でもすぐに取り繕う。

「見つかっちゃつたから。噛んだだけで終わつちゃつた」

裏にある物欲しそうな感情に、詐欺師は皿を差し出した。

「誰でもいいの?」

「誰でもつて訳じやない。でも……」

用意した皿に毒を盛る。

「なら、飲んでみる?」

「……条件は?」

大切なものを守るように彼女が僕に訴えかける。詐欺師はもう一度、優しく笑つた。

「そんないらないよ」

「いいの?」

「いいよ。話してくれたお礼に」

そう言つて詐欺師はカーテンを閉めて、少女の前に腕を差し出した。出された腕に初めは戸惑う様子だったが、拳を握り、しるしを見せ付けてやると彼女はそこに消毒を始めた。

「痛かつたら、言って」

そう言つた後、平沢の優しい犬歯が僕の血管を丁寧に破くイメージが見えた。溢れていく思いの中で僕は平沢の頭を撫でた。

「あら、どうしたの？」

保健の先生が帰ってきた時、平沢が僕の腕にガーゼと包帯を巻いている最中だつた。

「部活でふざけていたら切つてしまつて」

平沢が適当に誤魔化して保健室を出た。運動部が騒がしい廊下を歩きながら平沢が聞いてきた。

「男子つてもつと即物的なものじゃないの？」

どこか納得いかない様子で、図書室の平沢は僕に聞いた。

「具体的には？」

「それは、見返りとか、色々」

歯切れの悪い平沢に僕は面白くなつた。

「おいしかつた？」

風味が口に残つているのか少し考えてから平沢が言つた。

「分からんわ」

「僕も女の子に要求することなんてわからないよ」

平沢が面白くなさげな顔で僕の顔をのぞき込む。

「そうだとは思つてたけど甲斐性はやっぱりないよね」

「欲しいものがあるならちゃんと言つてよ。そっちの方が僕は嬉しいな」

平沢は心底嫌そうに言つた。

「変態」

(後書き)

何かあれば、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272v/>

子供の描く絵の貴賤

2011年7月30日03時10分発行